まちおこし特命社員連載小説 第二十二回 まちおこしに暗雲 その一 應 者を

渋谷和宏

ショーン・次川 (つぎかわ) 45歳、アメリカの投 喜多嶋翔 (きたじま・しょう) 25歳、西朱雀プロジェク

地区の生産者。元暴走族のリーダー。

榎太一 (えのき・たいち) 76歳、二名島バッテリーの創 業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者と して知られる。大渡晴美は娘、薫子は孫。

石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公、商店街

の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発の

ベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入

大渡薫子 (おおわたり・かおるこ) 21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

守屋良子(もりや・りょうこ) 42歳、尾花市で古民家

青山麻衣(あおやま・まい)24歳、悠太の元カノ。 悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、

の再生プロジェクトを手掛けるNPO法人の代表。

社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

悠太の仕事を手伝い始める。

はやると言ったことは必ずやり遂げます 庄さん、 が移転は阻止できませんよ。榎さ もう一つ言っておきます

実は伊予南市では、

農作物の収穫体

言葉が新庄の耳にいつまでもこだましてい 榎社長は間違いなくOB全員に「持ち株

阻止する方法はやはり一つしかない。 証拠を榎社長に突きつけ納得させる 伊予南市にとどまった方が二名島バッテ となると二名島バッテリーの本社移転を ーにとって経済的メリットがあるという 株を買い増すのは困難だ。

「守屋さん、伊予南市での古民家の再生に

イスブルジテン 資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。 新庄誠人(しんじょう・まこと) 39歳、伊予南市役所·地域振興課長。

ト社員、悠太の1年先輩。 小笠原一徹(おがさわら・いってつ)22歳、日下部

広岡卓次(ひろおか・たくじ)49歳、地域おこし

の元社員である兼原の

協力隊員として東京から伊予南市に移住したが・・ 名女川直行(なめかわ・なおゆき)27歳、麻衣の 会社員時代の先輩で彼氏、麻衣を追いかけて……。

からし を売るな」と釘を刺しているだろう。新庄 二名島バッテリ

たちがどう頑張ったところで、市としては そんなことができるのだろうか

ついてぜひご相談に乗っていただけません

登場人物

した後、 設に改装した「うなぎの寝床」の中を案内 り話をしましょう」と言い、町家を宿泊施 生したゲストハウスに泊まってもらおうと 画して都会から人を呼び込み、古民家を再 験や星空の観賞会のような体験ツアーを企 いうプロジェクトが動き出したんです」 「そろそろお腹が空いたんじゃない?」 良子は悠太と薫子を海岸沿いにある小体 悠太の言葉を聞いた良子は「後でゆっく 商店街の路地を海岸通りへと歩き

席を取った。 苦手じゃなければいってみない?」 「この店の名物はあなご丼なの。 あなごが

いがんじま)を窓越しに望める小上がりに な料理屋に案内し、尾花水道や対岸島(た

「さっきの話、聞きましょうか」 悠太と薫子が同時にうなずいた。

良子は悠太に向き直った。

麻衣からの電話で、攸前回までのあらすじ

石打悠太

新庄は二名島バッテリーのOBに株の買い取子に尾花市の古民家再生の現場に案内される。腕をほどいてしまった。翌日二人は、守屋良 りを提案するが、断られてしまう。 悠太は薫子を抱き しめた

再生しようという話が出ているんです」

「どんな古民家があるのかしら」

良子が興味を引かれた顔をした。

っかくツアーを企画するのなら、それらを ってしまった町家や農家が多くあって、 ないんです。

ただ伊予南市には空き家にな

せ

設に泊まってもらうという話だったわね」 ら旅行者を呼び、古民家を改装した宿泊施

「伊予南市で体験ツアーを企画して都会か

「何軒の古民家を改装するとか、どのくら

の予算を使うとか、まだ具体的な話では

った。

散したホテル』。もともとはイタリアで始 のヨーロッパの国々にも広がっているわ」 まったまちおこしの考え方で、 「イタリア語でアルベルゴはホテル、ディ 店主があなご丼を三つ、 ーゾは分散という意味で、直訳すると『分 テーブルに運ん 今ではほか

う言葉、聞いたことがあるかしら?」

たしかイタリアの……」

悠太は首を横に振った。

薫子の言葉に良子は「そのとおり」

と言

あなたたち、アルベルゴ・ディフーゾとい

というわけね。

面白いかもしれないわね。

街地の人口も減り始めています

から

「そんな町家や農家を宿泊施設に再生する

だあるんです。

高齢化で農家だけでなく市

心したようになずいた。

「伊予南市にはこんな空き家がほかにもま

面を見て「確かにいい感じのお家ね」と感

良子は薫子が差し出したカメラの液晶画

敵な家なので撮らせてもらったんです」

「石打さんが住んでいる社宅兼事務所、

素

薫子が鞄から一眼レフカメラを出した。

「あたし、

写真を持っているわ」

刺激したとたん、 あなごとたれの香ばしいにおいが鼻腔を 悠太のお腹が鳴った。

> 少し癖のあるあなごの味を引き立て、 止まらない よくあなご丼をかきこんだ。甘辛いたれが 悠太は「いただきます」も言わずに勢い 箸が

ちらをずっと見ていたのに気づいた。 ち着いた悠太は薫子と良子が興味深げにこ 一気に半分ほど食べ、 ようやくひとごこ

「なかなか見事な食べっぷりね。 かしら」 続けてす

「あ……はい、 アルベルゴ・ディフーゾ」

大正大学地域構想研究所ホームページ(http://chikouken.jp/chiikijin)では、

連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

下よく言えました。アルベルゴ・ディフー がとは一言で言えば、村や町全体を一つの 分散したホテルと考え、観光客を誘致しよ うという考え方なの。村や町のあちこちに うという考え方なの。村や町のあちこちに うという考え方なの。村や町のあちこちに う。夕食後には村や町の人たちが催す音楽 う。夕食後には村や町の人たちが催す音楽 たちと一緒に楽しんでもらったりする。 人口が減り空き家が増えてしまったマイナ スを、観光資源に変えようといういわば逆 転の発想ね」

ですね。素敵だわ!」「なるほど!」そのアルベルゴ・ディフー

薫子が歓声を挙げた。

「あたしは伊予南市には行ったことがないけれど、農作物の収穫体験や星空の観賞会のような体験ツアーを企画できる町ならば、アルベルゴ・ディフーゾの考え方を生かせるかもしれないと思ったのよ。石打くん、るかもしれないと思ったのよ。石打くん、東京から来たあなたが見て、伊予南市はいして、

悠太はパン焼き工房・まつしまの庭から

そう言えば広岡は「伊予南市には懐かしたり言えば広岡は「伊予南市には懐かして冬に立ち枯れる――そんな森の風景も都て冬に立ち枯れる――そんな森の風景も都にあら来た人たちの心を癒やしてくれるに違いない。

言った。良子はあなご丼を口に放り込み、悠太に

ら」
「一度、伊予南市を案内してくれないかし

午後、さらに二軒の古民家を見学した悠太と薫子は良子に礼を言い、JR在来線で

時刻は午後三時過ぎ、後方のシートに薫子と並んで座った悠太は発車直後に意識を失い、目が覚めた時にはバスはもうJR伊予南駅に向かう見覚えのある県道を走って下た。

とも疲れて眠くなるのは当然だけれど、 は、日差しを浴びながら坂道や階段の多 は、足も疲れて眠くなるのは当然だけれど、 長り返ってみれば今度の旅行では悠太は乗 振り返ってみれば今度の旅行では悠太は乗 をでは薫子が静かに寝息を立てている。

家についての話題以外、何も話さなかった。家についての話題以外、何も話さなかったく

こした。 薫子が薄目を開け、息を吐きながら伸び

よー「目が覚めたかな?」そろそろ伊予南市だ

藁子が悠太に何か言葉を返そうとしたの今度の旅行はこのパターンばかりだ。 今度の旅行はこのパターンばかりだ。

るように言った。
喜多嶋はあいさつも前置きもなしになじ「いまどこにいるんだよ」

「六時までに帰れるか?」「伊予南市に向かうバスの中ですけれど」

「たぶん」

唇多鳥) 盲) 間子がい「それは良かった!」

た。 喜多嶋の声の調子がいくらか明るくなっ

「喜多嶋さん、どうしたんですか?」「喜多嶋さん、どうしたんですか?」「あの小笠原がこっちに来ると言うんだよ。の子南フェアに協力すると言っていただろけ。 麻衣さんが『売り切れるめどが立った』と連絡したら、すぐにでも話をしようって言い出しやがって……」

さ。あいつ、酒癖悪かったりしないだろう「午後六時に酒やつまみを持って来るって「事務所兼社宅に来ると言うんですか」

な」 な。もう首を絞められるのはごめんだからさ。あいつ、酒癖悪かったりしないだろうさ

動かした。

をなる動作はうこ言って。「そういうことなら……」

悠太は諭すように言った。

「新庄さんや広岡さんも呼んだらどうでしなければならないことをまとめて話し合うなければならないことをまとめて話し合う。

帰って来いよ!」くよ。お前も道草なんかしないでとっとと「それ、いいかもな! 俺から連絡してお

喜多嶋は弾んだ声で言い電話を切った。

でいた。

よーでいたけれどようやく前進し始めたんだ予南フェアを開催する予定なんだ。難航しでいたけれどようやく前進し始めたんだ。

みたい」
「うまくいくといいわね。石打さん、初め

「ありがとう」

悠太は耳たぶが赤くなったのを意識した。

たショーン・次川にソファに座るよう顎を榎は「どうぞ」と言い、部屋に入ってき

「君のボスのマイケル・ヴィンセントは晴「まあ、ぼちぼちです」「久しぶりだな。元気でやっているかね」

うだな」 美たちに持ち株を売ってもいいと言ったそ

「いや、そうじゃない。君に来てもらったね。今日もまたそのお話ですか?」ね。今日もまたそのお話ですか?」

だろう? 君はこの伊予南市の生まれじゃて、東京出身だと書いているね。それは嘘のホームページにプロフィールを載せてい「次川くん、君はヴィンセント・ファンド

「図星だったようだな」

ないのか?」

榎は満足げに微笑んだ。

ちと同じような立場に置かれた町工場がほ関に受けた仕打ちのことだ。その時、俺た憶がまた蘇ってね。この町の住人や金融機億がまた蘇ってね。この町の住人や金融機

かにもあったのをふいに思い出したんだよ。 そこは電子部品向けのセラミックスを作ろうとしていたが、地元の金融機関からの追がの融資を受けられなかったばかりか、『うるさい』 『臭い』 などと周りの住民たちから立ち退きを迫られ、伊予南市を出ていっら立ち退きを迫られ、伊予南市を出ていっくらか若い、岡山大学の大学院を出た男で、 くらか若い、岡山大学の大学院を出た男で、 次川という苗字だった。 君は彼の息子なんじゃないか?」

ましたか?」

う?|てくれないか?「君は彼の息子なんだろ「おおいに〝どうかする〞よ。質問に答え

のは君についての話をしたいからだ」

川秀一の息子です。六歳まで伊予南市に住南セラミックスという町工場を起こした次南セラミックスという町工場を起こした次

なっているそうだな」 「次川社長は君が高校に入学する前に亡く

すか?」「よくご存じですね。お調べになったんで

が目的だ?」
「部下と探偵を使ってね。ついでに君の行動も調べさせてもらった。このところ、ち動も調べさせてもらった。このところ、ち

「仕事ですよ」

次川は動揺を悟られまいと苦笑いしてみ

疑問だな。疑問と言えば、そもそも君たち が退職した社員たちから株を買い取ろうと した目的は何だったんだ?」 その答えは私にははなはだ

「決まっているじゃないですか。ビジネス

自ら移転を決断し発表した。つまり君はシ 目的を達成したわけだ」 ナリオ通りには行かなかったものの所期の ところが私は君たちに迫られるよりも前に そんなシナリオを描いていたんだろう? 主総会で動議を出して我々に移転を迫る。 社工場を伊予南市から移転させることにあ ったんじゃないのか? 「君の本当の狙いは二名島バッテリーの本 株を買い占め、株

なんですか」 予南市から移転させたがっているとお考え 「榎社長はなぜ私が二名島バッテリーを伊

「君が伊予南市に復讐したがっているから

次川は榎を見つめた。

者は今も昔も会社の借金の保証人をさせら いった二年後に倒産しているね。創業経営 「君の父親についても調べさせてもらった 伊予南セラミックスは伊予南市を出て 君の父親は恐らく債権者である

> 遇に置かれたかは想像に難くないよ」 前に亡くなった。君が少年時代、どんな境 伊予南市の金融機関から身ぐるみをはがさ れただろう。 しかも彼は君が高校に上がる

「だから私が伊予南市に復讐心を抱いてい

ると言うんですか」

灯っていた」 積極的に話さなくても親の口惜しい思いは わ たぎる怒りを内に抱えた人間に特有の光が の印象を私は忘れないよ。君の目には煮え 山の上のレストランで初めて君に会った時 子供に伝わるものだ。清谷へと向かう途中、 の恨みつらみを君に話して聞かせたはずだ 「私には君の父親の口惜しい気持ちがよく かる。彼は伊予南市の金融機関や住人へ

「榎さんは私に何をおっしゃりたいのです

るんだ。何を企んでいる?」 「君は何のために伊予南市にやってきてい

ビニでビールと焼き鳥などのつまみを買い、 社宅兼事務所に戻った。 伊予南市駅前で薫子と別れた悠太はコン

相変わらず異様な迫力を全身から発散させ ている。 たな」という声がして小笠原が姿を見せた ドアを開けたとたん「よお! 帰ってき

「今ちょうど麻衣さんと名女川とかいうオ

タクっぽいのと三人で飲み始めたところ

石打悠太

馬鹿者を

なっていない 悠太は腕時計を見た。 まだ午後六時には

「喜多嶋さんは?」

「まだ仕事が残っているってよ。事務所で 畳部屋には麻衣と名女川がいて、缶ビ ソコン打ってら」

の漬物が並んでいて、どれも美味しそうだ。 ルを飲もうとしていたところだった。 しいチャーシューやローストビーフ、山菜 ちゃぶ台の上には小笠原が持ってきたら

0

「悠太、成果はあった?」 悠太に気づいた麻衣が嬉しそうな顔をし

「じゃ、これは祝杯ね」 「力になってくれそうな人を見つけたよ」 麻衣が缶ビールを悠太に差し出した。

受け取ったのと同時に玄関の呼び鈴が鳴

てやってくるはずはないので玄関で鉢合わ 新庄と広岡だった。この二人が連れ立っ

「広岡さん、久しぶりです」

言うのですか」 「石打くん、関係者を集めて何をしようと 小笠原が神妙な顔であいさつした。

新庄が悠太に聞いた。

決めごとをしたいと思ったんです」 まであと四十日とちょっとです。いろいろ 「西朱雀地蔵通り商店街での伊予南フェア

所に腰を下ろした。 やく姿を現わし、小笠原から最も離れた場 名女川がちゃぶ台を囲んだ。喜多嶋もよう 畳部屋では麻衣、新庄、広岡、小笠原、

合 下部地区のリーダーとして、 たのは来月の伊予南フェアに向けての打ち わけありません。今日、お集まりいただい 「土曜日の夕刻にもかかわらず本当に申し わせです。まず小笠原さん、約束通り日 生産者に協力

してもらえるように声をかけてもらえます

のタピオカミルクもな。それらの輸送や搬 ジャムを提供する。ビワのコンポート入り 夫だ。もちろん俺も栗の紅茶煮や栗の紅茶 など樹木の皮で編んだバッグ……全部大丈 入はどうする?」 野イチゴを使ったスイ 取り付けたよ。キノコの雑炊、ナッツ類や 「当たり前だ! それどころかもう協力を -ツ、クヌギやナラ

新しい会社で請け負います」 送業者の手配は私と広岡さんとで設立した 「会社の名前、決まったんですか?」 「私たちがやりますよ。集荷の段どりや運

「『伊予南プロジェクト』です。 いい名前

星空やホタルの観賞会のような体験ツアー の募集を伊予南フェアでかけてみたいと言 っていましたよね。予定通りやってくれま 「広岡さん、以前、農作物の収穫体験とか 悠太に尋ねられた新庄は得意げに答えた

施設だ。古民家の再生、業者のめどがつい たのか?」 フレットは余裕でつくれるよ。問題は宿泊 「もちろんだ。一カ月あれば募集用のパン

トを手掛けるNPO法人の代表の方が力に 「はい、尾花市で古民家の再生プロジェク

> なってくれます。広岡さん、近々、その人 に会っていただけますか」

行代理店の資格が必要よね。宿泊施設もい ろんな規制があると聞いているわ」 「でもツアーを企画して人を集めるには旅

設の規制をクリアできるように手筈を整え 市内の旅行会社を通して行います。宿泊施 「そこは任せてください。ツアーの募集は 麻衣が口を挟んだ。

新庄が答える。

「さっきの伊予南フェアの話だけどよ」 小笠原が口を突っ込んだ。

東京で花火を一発打ち上げて、それで終わ 「フェアが終わったら後はどうするんだ?

Kazuhiro Shibuya

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜生まれ。 日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長 「日経ビジネス」発行人などを務めた後 2014年3月末、独立。 1997年に長編ミステリー 『銹色 (さびいろ)の警鐘』(中央公論新社)で作家デビュー。 TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。

す。商店会がその運営を僕たち西朱雀プロ 営んでいた老夫婦が老人ホームに入ること ジェクトに任せてくれることになって」 になって、商店街が空き店舗ができたんで ンテナショップを開店します。長く酒屋を 「いえ、西朱雀地蔵通り商店街に常設のア 「そいつはいいな!」

「後はどう宣伝するかだな」 小笠原が膝を打った。

「僕がやりましょう」

「ホームページ、僕がつくりますよ」 が言った。